新春スペシャル対談　滝沢秀一［マシンガンズ・ゴミ清掃員］×新津春子［日本空港テクノ(株)勤務］

現場で感じた新型コロナウイルスの恐怖

――コロナ禍にあって、様々な現場で休むことなく働き続けているエッセンシャルワーカーの存在が改めてクローズアップされています。まずは昨年、新型コロナウイルス感染症が流行し始めた2月頃の話からお聞かせください。

滝沢　あの頃はまだ、特に一般の方々は「コロナとゴミ」というものが結びついていなかったように思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

新津　私は職場が羽田空港ですから、元々そうした疾病対策や環境衛生管理に関しては、常に緊張感を持って仕事をするよう教育されてきました。でも当初、2月中旬の頃は私、コロナ関係の情報を中国から集めていたんです。その頃は、まさか自宅に入ってくるとは思わなかったのですが、下旬くらいからは、常に緊張感を持って仕事をするので、元々マスクは必需品だったんです。

新津　そこは絶対必要ですよね。

滝沢　だから通常は会社から支給されていたんですけど、コロナが流行してドラッグストアで買い占めが始まったじゃないですか。その頃になると会社でも手に入らないからって、個人任せになっちゃった。自分で買いに回ったり、仲間同士で分け合ったり、結構大変だったんですよ。

新津　マスク不足の時、私はテレワークの中、あちこちに働きかけたんです。すると新しい素材でマスクを作ったり、咳エチケット取りシートを使ってマスクを作ったりと、皆さん工夫してくれたんですよ。助け合いの精神があるのは素晴らしいと思います。

――その頃実際、現場で「これはちょっと怖いな」と感じたことはありませんでしたか？

滝沢　やはり、感染のリスクはありますもね、変な話、ゴミ清掃員も一般の方々と同じで、コロナは知識のためったわけです。目に見えるものではないに、何せカ所、何千カ所と東京のゴミを回収していく。必ずどこかにコロナウイルスが残っているんなんですよ。特に、ちゃんとゴミの分別がされておらず、燃えるゴミの中にビンや缶が入っていると、ゴミ袋を開けてそれを置いていなければなりませんへ。その時、ウイルスが外に出てくるんじゃないか…とか。そんな恐怖感と向かい合いながら、日々回収していました。

新津　皆さんステイホームで家にいたから、生ゴミも多かったんじゃないですか？

滝沢　そうなんです。皆さん家で仕事をして、ご飯もほとんど家で食べていたでしょう。だから生ゴミも多かったけど、お酒の量も増えたのかビン、缶、ペットボトルも多かったですね。普段から3～4月は引っ越しシーズンでゴミは多いんですが、家の片付けとか断捨離した人が多かったようで、例年の1～5倍から2倍近くゴミが出ました。

――逆に羽田空港は閑散としていましたよね。

新津　3月初めの頃は、巡回しに行くと、まだ団体客の方々がいらっしゃったんですよ、アルコール消毒液もんね、特効薬に出ていない以上、常に「増える」恐れがあると思っていれば、緊張感はずっと保っていられます。解除になったら、マスクを外して有自由にしていいんだ…と判断した人もいたようですが、私はその考え方は「コロナとゴミ」というものが結びついていないからこそ、と思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

新津　私は職場が羽田空港ですから、元々そうした疾病対策や環境衛生管理に関しては、常に緊張感を持って仕事をするよう教育されてきました。でも当初、2月中旬の頃は私、コロナ関係の情報を中国から集めていたんです。その頃は、まさか自宅に入ってくるとは思わなかったのですが、下旬くらいからは、常に緊張感を持って仕事をするので、元々マスクは必需品だったんです。

新津　そこは絶対必要ですよね。

滝沢　だから通常は会社から支給されていたんですけど、コロナが流行してドラッグストアで買い占めが始まったじゃないですか。その頃になると会社でも手に入らないからって、個人任せになっちゃった。自分で買いに回ったり、仲間同士で分け合ったり、結構大変だったんですよ。

新津　マスク不足の時、私はテレワークの中、あちこちに働きかけたんです。すると新しい素材でマスクを作ったり、咳エチケット取りシートを使ってマスクを作ったり、皆さん工夫してくれたんですよ。助け合いの精神があるのは素晴らしいと思います。

――その頃実際、現場で「これはちょっと怖いな」と感じたことはありませんでしたか？

滝沢　やはり、感染のリスクはありますもね、変な話、ゴミ清掃員も一般の方々と同じで、コロナは知識のためったわけです。目に見えるものではないに、何せカ所、何千カ所と東京のゴミを回収していく。必ずどこかにコロナウイルスが残っているんなんですよ。特に、ちゃんとゴミの分別がされておらず、燃えるゴミの中にビンや缶が入っていると、ゴミ袋を開けてそれを置いていなければなりませんへ。その時、ウイルスが外に出てくるんじゃないか…とか。そんな恐怖感と向かい合いながら、日々回収していました。

新津　皆さんステイホームで家にいたから、生ゴミも多かったんじゃないですか？

滝沢　そうなんです。皆さん家で仕事をして、ご飯もほとんど家で食べていたでしょう。だから生ゴミも多かったけど、お酒の量も増えたのかビン、缶、ペットボトルも多かったですね。普段から3～4月は引っ越しシーズンでゴミは多いんですが、家の片付けとか断捨離した人が多かったようで、例年の1～5倍から2倍近くゴミが出ました。

――逆に羽田空港は閑散としていましたよね。

新津　3月初めの頃は、巡回しに行くと、まだ団体客の方々がいらっしゃったんですよ、アルコール消毒液

【新津春子氏略歴】1970年、中国・瀋陽生まれ。17歳で来日し、高校に通いながら清掃の仕事に携わる。95年、日本空港テクノ株式会社に入社し、羽田空港の清掃員となる。97年には当時史上最年少の27歳で全国ビルクリーニング技能競技会優勝、「ビルクリーニング技能士」「ハウスクリーニング技能士」等の国家資格を持つ。2015年4月からは「環境マイスター」として後進の指導にあたる。18年、ハウスクリーニング「思う心」を立ち上げる。現在、YouTube「新津春子のやさしい お掃除チャンネル」を配信中。著書多数。

清掃をする場所は思いやりと優しさを持って清掃したい。（新津）

を十分に用意する前だったら、あの時が一番怖かったですね。自分で自分を守るしかないから、ちょっと人と離れていましたね。

滝沢　そのうちに人間も出国も制限がかかってきましたね。

新津　1日平均20万人いる羽田空港のお客様が、過去最大の大幅減になりました。当然ご存じでしょうが、いつも1日24時間稼働している空港のゴミ焼却炉が、ほとんど稼働されなかった。5月末には精神大変で、仕事をどうしようかなと思っていました。

滝沢　緊急事態宣言が出て、ゴミ清掃員の人数は増えたんですよ。例えば旅行会社の方々が、水商売をしていたんとか、7～8月まで仕事がないから、その間何か違った仕事をしようとして結構入ってきました。ゴミ清掃やるの怖くない？って聞いたら、「生活しなきゃいけないから、なんとこ言っていられない」と言うんです。あと、わずと自分の中に情報を入れないようにしたんですよね。コロナのことを詳しく知っちゃうと、怖くなって毎日の仕事ができなくなるからって。

――緊急事態宣言が5月25日に解除されてからはいかがでしたか？

新津　それでも結局、コロナの感染者がいなくなったわけではなかったですもんね。特効薬に出ていない以上、常に「増える」恐れがあると思っていれば、緊張感はずっと保っていられます。解除になったら、マスクを外して有自由にしていいんだ…と判断した人もいたようですが、私はその考え方は「コロナとゴミ」というものが結びついていないからこそ、と思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

滝沢　あの頃はまだ、特に一般の方々は「コロナとゴミ」というものが結びついていなかったように思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

新津　私は職場が羽田空港ですから、元々そうした疾病対策や環境衛生管理に関しては、常に緊張感を持って仕事をするよう教育されてきました。でも当初、2月中旬の頃は私、コロナ関係の情報を中国から集めていたんです。その頃は、まさか自宅に入ってくるとは思わなかったのですが、下旬くらいからは、常に緊張感を持って仕事をするので、元々マスクは必需品だったんです。

新津　そこは絶対必要ですよね。

滝沢　だから通常は会社から支給されていたんですけど、コロナが流行してドラッグストアで買い占めが始まったじゃないですか。その頃になると会社でも手に入らないからって、個人任せになっちゃった。自分で買いに回ったり、仲間同士で分け合ったり、結構大変だったんですよ。

新津　マスク不足の時、私はテレワークの中、あちこちに働きかけたんです。すると新しい素材でマスクを作ったり、咳エチケット取りシートを使ってマスクを作ったり、皆さん工夫してくれたんですよ。助け合いの精神があるのは素晴らしいと思います。

――その頃実際、現場で「これはちょっと怖いな」と感じたことはありませんでしたか？

滝沢　やはり、感染のリスクはありますもね、変な話、ゴミ清掃員も一般の方々と同じで、コロナは知識のためったわけです。目に見えるものではないに、何せカ所、何千カ所と東京のゴミを回収していく。必ずどこかにコロナウイルスが残っているんなんですよ。特に、ちゃんとゴミの分別がされておらず、燃えるゴミの中にビンや缶が入っていると、ゴミ袋を開けてそれを置いていなければなりませんへ。その時、ウイルスが外に出てくるんじゃないか…とか。そんな恐怖感と向かい合いながら、日々回収していました。

新津　皆さんステイホームで家にいたから、生ゴミも多かったんじゃないですか？

滝沢　そうなんです。皆さん家で仕事をして、ご飯もほとんど家で食べていたでしょう。だから生ゴミも多かったけど、お酒の量も増えたのかビン、缶、ペットボトルも多かったですね。普段から3～4月は引っ越しシーズンでゴミは多いんですが、家の片付けとか断捨離した人が多かったようで、例年の1～5倍から2倍近くゴミが出ました。

――4月26日に全国に緊急事態宣言が出された時は、何か変化がありましたか？

新津　空港の仕事もそうですけども、

【滝沢秀一氏略歴】1972年、東京都足立区生まれ。1998年に西堀亮とお笑いコンビ「マシンガンズ」を結成。「THE MANZAI」2012、2014年認定漫才師。2012年、変収入を得るために、お笑い芸人の仕事を続けながらゴミ収集会社に就職。ゴミ収集中の自身の体験や気づき、食品ロス、格差社会、環境問題等の社会世相を発信したTwitterが人気を集め、各方面から注目を浴びている。著書で清潔を担当している友紀夫人との結婚記念日は5月30日（ゴミ＝ゼロの日）。環境省「サステナビリティ広報大使」。林太田プロダクション所属。

ゴミ清掃は「リスペクト」を足して「4R」にした方がいい。（滝沢）

滝沢　僕は今、6つほどの会社に日替わりで行くような形でやっています。それぞれの会社には、やはりカラーがあります。大体、その会社の上の方の人に似たような部下が集まりますね（笑）。逆に言うと、残るのは上司に似たタイプの人ということんでしょうね。気が合うから。

新津　仕事のやり方も違いますか？

滝沢　違いますよ。清掃車の動かし方自体から違います。例えばA社はまず回転板を動かしてからゴミを入れるけど、B社はゴミをまずから回転板を動かすとか、会社によって細かいルールが違うので、僕としては違うこの会社の車はどういうルールなんだろうということを探るところから始めます。だから僕自身は、自分のやり方は一切持っていません。ビルクリーニングのほうがどうですか？

新津　やはり会社によって、かなり方針が違いますね。大きい会社ほどルールが細かいように思います。でもその割に、現場での作業の細かいところまでは統一されていない。例えばトイレ一流ってしていても、やり方が人によってバラバラなんですよ。そこは個人経営の小さな会社のほうが、みんな同じやり方をする傾向がありますね。

――業界として統一されたやり方があった方がいい気もしますが？

滝沢　そうなんですよ。それで、僕はこの「3R」にリスペクト（敬意）を足して「4R」にした方がいいって、いろんなところで話をしているんですね。「ゴミ清掃員」というものを、「リスペクト」の対象にしたいんです。ゴミ清掃員の人数は増えたんですよ。ただ、やはりカラーがあるんですよ。ゴミ清掃やるの怖くない？って聞いたら、「生活しなきゃいけないから、なんとこ言っていられない」と言うんです。あと、わずと自分の中に情報を入れないようにしたんですよね。コロナのことを詳しく知っちゃうと、怖くなって毎日の仕事ができなくなるからって。

――緊急事態宣言が5月25日に解除されてからはいかがでしたか？

新津　それでも結局、コロナの感染者がいなくなったわけではなかったですもんね。特効薬に出ていない以上、常に「増える」恐れがあると思っていれば、緊張感はずっと保っていられます。解除になったら、マスクを外して有自由にしていいんだ…と判断した人もいたようですが、私はその考え方は「コロナとゴミ」というものが結びついていないからこそ、と思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

滝沢　あの頃はまだ、特に一般の方々は「コロナとゴミ」というものが結びついていなかったように思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

新津　私は職場が羽田空港ですから、元々そうした疾病対策や環境衛生管理に関しては、常に緊張感を持って仕事をするよう教育されてきました。でも当初、2月中旬の頃は私、コロナ関係の情報を中国から集めていたんです。その頃は、まさか自宅に入ってくるとは思わなかったのですが、下旬くらいからは、常に緊張感を持って仕事をするので、元々マスクは必需品だったんです。

新津　そこは絶対必要ですよね。

滝沢　だから通常は会社から支給されていたんですけど、コロナが流行してドラッグストアで買い占めが始まったじゃないですか。その頃になると会社でも手に入らないからって、個人任せになっちゃった。自分で買いに回ったり、仲間同士で分け合ったり、結構大変だったんですよ。

新津　マスク不足の時、私はテレワークの中、あちこちに働きかけたんです。すると新しい素材でマスクを作ったり、咳エチケット取りシートを使ってマスクを作ったり、皆さん工夫してくれたんですよ。助け合いの精神があるのは素晴らしいと思います。

――その頃実際、現場で「これはちょっと怖いな」と感じたことはありませんでしたか？

滝沢　やはり、感染のリスクはありますもね、変な話、ゴミ清掃員も一般の方々と同じで、コロナは知識のためったわけです。目に見えるものではないに、何せカ所、何千カ所と東京のゴミを回収していく。必ずどこかにコロナウイルスが残っているんなんですよ。特に、ちゃんとゴミの分別がされておらず、燃えるゴミの中にビンや缶が入っていると、ゴミ袋を開けてそれを置いていなければなりませんへ。その時、ウイルスが外に出てくるんじゃないか…とか。そんな恐怖感と向かい合いながら、日々回収していました。

新津　皆さんステイホームで家にいたから、生ゴミも多かったんじゃないですか？

滝沢　そうなんです。皆さん家で仕事をして、ご飯もほとんど家で食べていたでしょう。だから生ゴミも多かったけど、お酒の量も増えたのかビン、缶、ペットボトルも多かったですね。普段から3～4月は引っ越しシーズンでゴミは多いんですが、家の片付けとか断捨離した人が多かったようで、例年の1～5倍から2倍近くゴミが出ました。

――7月22日には、「Go　To　キャンペーン」が始まりました。

滝沢　東京は遅かった（10月から）ですもんね。だからゴミの増えた、減ったはなかったです。ただ、例年でいえば、今はオガクンの減ることが分かったです。やっぱり皆さん、家にいたからでしょうね。その分、空港ではインバウンドが増えたんじゃないですか？

新津　7月以降、国内線は増えましたね。国際線もしだい増えましたけれども、まだやっぱり寂しい感じでしたよ。

外国人との接し方と業界の統一ルール

――本格的な冬の到来を迎えて、気を付けたいことはありますか？

新津　第3波が来る前、もうコロナは終息したという感覚の人が多いにあって、結構ここに行ってもマスクを使わない人を見たんですよ。特に年配の方。私も一人で外を歩いたり、自転車に乗ったりしていた時、周囲に誰もいなければマスクを外していたこともありました。でも、最初から外れる人が来たら、すぐ着けられるように工夫してます。でも、最初から持っていないが結構いるのには、ビックリしましたね。私は今も1日2回、朝晩体温を計っています。手洗いや消毒はもちろん、うがいもちゃんと重要を使ってやっています？

新津　口の中が酸性の状態になるのを中和して、ニオイを防いでいるんですよ。昔からおじいちゃん、おばあちゃんがやってきた先人の知恵ですね。500㎖の水に対して重曹ひと一、マスクを着けつぱ＋しだと口臭が気になるので、やってみてください。

滝沢　僕は全場の体調管理というよ、睡眠を十分に取ることくらいです。コロナ以前からインフルエンザが毎冬流行っていたでしょう。あれ、どう考えてもミスの中にもインフルエンザウイルスがいるとは思うんですよ。とこうが、ゴミ清掃員でインフルエンザに罹る人、体が強いんですね、慣れているというか。笑。やっぱり日頃から体を動かして仕事している人間は、体力があるんですよ。

滝沢　特別なことではないかもしれないですけど、やっぱり適度な運動と十分な睡眠、そして手洗い、うがいとうまめなうがいなんでしょうね。

新津　自分でも、思ったより反響があって不思議でしたね。一つには「マシンガンズ」というコンビでお笑い芸人をやって、ある程度テレビに出ていた人間が今はゴミ清掃員になったということが注目されたんじゃないかと思います。でもそれ以上に、ゴミ清掃の仕事を皆さんが知らなかったので面白く読めたらいいです。僕自身、単純にご飯を食べるだけの仕事をやなくて、途中から清掃員が楽しくなってきましたね。それを本人に伝えることもあるし、今当たり前のように生活している、その中の無駄使いや無駄な消費がゴミから見えてくることもたくさんあります。本の中には、そういう話が詰まっています。

新津　私は2015年にNHK出版で仕事の様子が紹介された後、出版社から話がどんどん来たんですね。最初は出版社が皆さんにアドバイスされるままに本を作ったんですが、だんだんと自分でも面白くなってきました。私が知っている清掃のことを、皆さんは知らないけれども必要なものとは、自分の知識がそこまで必要なものとは、テレビに出ることで気が付きませんでしたんです。だから、テレビに出て考え方が変わったんです。人に伝えることが、こんなに大事だとは思っていませんでした。工夫次第で誰でもがラクにして、人生をもっと楽しめる、清掃のあれこれを、これから先も紹介できたらいいなと思っています。また、それに加えて、コロナ禍の体験から得た新しい気付きや発見とかこの要素方にも、深いです。生きていくのに必要なものになりますから。皆さん、ぜひ勉強されたらと思います。

今こそエッセンシャルワーカーにエールを！

――ところでゴミ清掃の世界も以前と比べて外国出身の人が増えたと聞きますが、外国人とのコミュニケーションでは、どんなことを心掛けていますか？

滝沢　まず出身地と、その国のゴミのことを聞きます。例えばギニア人だったら、「ギニアってどうやってゴミを回収するの？」と、自分の国のことは皆、結構話したがるんですよ。そうしているうちに、いつの間にか仲良くなれます。また向こうから見ても、日本のゴミの出方って特異に見えるらしく、「どういうところが不思議なの？」と聞いてみると、こっちとしては興味深い、割とコミを共通の話題にして仲良くなっていますね（笑）。あとは向こうにいる恋人がどうとか、日本人の彼女ができたとか、あまり外国人だから」とか気にせず、普通に聞きたいことを何でも聞いていけば、すっと仲良くなれます。陽気な人が多いので、日本人よりラクかもしれません。知り合ったその日に、「今日、飲みに行こうよ」って誘われたこともありますかね。何カ国ぐらいから来ているのですか？

滝沢　1回ぐらいしか会ったことのない人も入れると、かなり多いですよ。アフリカの何カ国かからと中国、韓国、香港、アメリカ、フランス…。バイト感覚で仕事しているもいます。

新津　日本語で会話するのですか？

滝沢　向こうの日本語がありうまくなったとしても、こっちも知っている英単語を並べて、あとはボディーランゲージとかかんれると、意外と通じるもんですよ。

新津　私は会社が大きいほど、外国人の方々は苦労するんじゃないかと思うんです。会社のルールは、あくまでも日本人に合わせるルールになっている傾向があります。だから、それこそ滝沢さんみたいに「あなたの国ではどうやってゴミを回収して、どうやって処理しているの？」と、生活の仕方をもう少し聞いたらどうでしょうか。

滝沢　ゴミ清掃は公の仕事なので、基本的なルールはあるんですよ。ただ、その範囲の中で現場がやりやすいやり方でやっているのが現実だと思います。繁華街で回収するのと閑散と住宅街で回収するのとでは、やはりやり方も違ってくるとうと、僕としては現場に最も適したやり方を選ぶのがベストと思っていますから、それを全力で補助するようにしています。あと意識、全国的に見ても自治体ごとにゴミのルールが違うんですよ。焼却炉の問題も含めて、自治体それぞれの事情もあるでしょうから、僕はそれぞれの事情もあってもいいのではないかと思っています。

新津　清掃業界に関しては、それぞれの会社で使っている掃除機などの機材が、メーカーごとに違いますよね。だから全部統一するには、それこそ何とかしなくてはいけないこともありますよ。ただ、ある程度のマニュアルは必要だと思うんですよね。例えばカーペットを洗う時、一般的には一度掃除機をかけてから洗うんですが、そこで今、見た目がキレイだから、掃除機はかけずにこのまま洗いましょう」という会社もあるんです。でも、そうするとホコリがどんどんカーペットの中に入っていってしまうんです。カーペットにもよるんですし、「モノを大切にする」という観点から技能検定試験では、まず掃除機をかけてから洗う」と統一しないといけないと思うんですけどね。

滝沢　今までは、そういうことって「国がやればいい」「企業がやればいい」「他人がやればいい」という感じでしたね。みんな誰かに任せっていた。だから、僕は、「国民の仕方がいけない」とか言うのは、三位一体でやってこなければいけないと思います。まだまだ食べ物のゴミとか、手つかずの未接に捨てられることが結構あるのですよ。そういうのを目のあたりにすると、「本当にこのままでいいのかな」と思います。だから、そこには、プラスチックも含まれるとは思うんですが、首相の発言きっかけに、そのあたりを総合的にみんなで考えていけばいいんだなと思っています。

新津　総理大臣が国の方針としてキチンと言葉にしていたのは、とてもいいことだと思います。演説さんが言った通り、国や企業に任せてはないんです。みんなで一緒に考えて、見直みが捕まえないと、羽田空港でもいろいろ実験的な試みが始まっているようですが、私はそのへんについてはまだチラッとしか聞いていなくて…。でも後ろからついていかず、楽しみにしています。

――お二人はゴミの問題に関して、今後どんなふうに取り組んでいくつもりですか？

滝沢　ゴミ清掃業界とはそこに「3R」という言葉が出ばれているんです。リデュース、リユース、リサイクルですね。リデュースは、ゴミを減らす。リユースは物を変えずに、そのまま使う。詰め替え用の変ってのシンプルを買って、ボトル本体を再利用するのかなれて、すね。リサイクルは、形を変えてまた使うので、エネルギーがいる。これは苦肉の策でやっている部分もあります。

新津　本当はゴミを減らすのが一番ですよね。

滝沢　それで、僕はこの「3R」にリスペクト（敬意）を足して「4R」にした方がいいって、いろんなところで話をしているんですね。「ゴミ清掃員」というものを、「リスペクト」の対象にしたいんです。ゴミ清掃員の人数は増えたんですよ。ただ、やはりカラーがあるんですよ。ゴミ清掃やるの怖くない？って聞いたら、「生活しなきゃいけないから、なんとこ言っていられない」と言うんです。あと、わずと自分の中に情報を入れないようにしたんですよね。コロナのことを詳しく知っちゃうと、怖くなって毎日の仕事ができなくなるからって。

――緊急事態宣言が5月25日に解除されてからはいかがでしたか？

新津　それでも結局、コロナの感染者がいなくなったわけではなかったですもんね。特効薬に出ていない以上、常に「増える」恐れがあると思っていれば、緊張感はずっと保っていられます。解除になったら、マスクを外して有自由にしていいんだ…と判断した人もいたようですが、私はその考え方は「コロナとゴミ」というものが結びついていないからこそ、と思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

滝沢　あの頃はまだ、特に一般の方々は「コロナとゴミ」というものが結びついていなかったように思います。でも横浜のクルーズ船（ダイヤモンドプリンセス号）で集団感染が発覚して、職業柄、あの船に出るゴミはどうするんだろう？と考えた時から、もしコロナが市中に蔓延したら、やはり僕らゴミ清掃員はコロナと対峙しなければならないんだろうなと覚悟はしていました。

新津　私は職場が羽田空港ですから、元々そうした疾病対策や環境衛生管理に関しては、常に緊張感を持って仕事をするよう教育されてきました。でも当初、2月中旬の頃は私、コロナ関係の情報を中国から集めていたんです。その頃は、まさか自宅に入ってくるとは思わなかったのですが、下旬くらいからは、常に緊張感を持って仕事をするので、元々マスクは必需品だったんです。

新津　そこは絶対必要ですよね。

滝沢　だから通常は会社から支給されていたんですけど、コロナが流行してドラッグストアで買い占めが始まったじゃないですか。その頃になると会社でも手に入らないからって、個人任せになっちゃった。自分で買いに回ったり、仲間同士で分け合ったり、結構大変だったんですよ。

新津　マスク不足の時、私はテレワークの中、あちこちに働きかけたんです。すると新しい素材でマスクを作ったり、咳エチケット取りシートを使ってマスクを作ったり、皆さん工夫してくれたんですよ。助け合いの精神があるのは素晴らしいと思います。

――その頃実際、現場で「これはちょっと怖いな」と感じたことはありませんでしたか？

滝沢　やはり、感染のリスクはありますもね、変な話、ゴミ清掃員も一般の方々と同じで、コロナは知識のためったわけです。目に見えるものではないに、何せカ所、何千カ所と東京のゴミを回収していく。必ずどこかにコロナウイルスが残っているんなんですよ。特に、ちゃんとゴミの分別がされておらず、燃えるゴミの中にビンや缶が入っていると、ゴミ袋を開けてそれを置いていなければなりませんへ。その時、ウイルスが外に出てくるんじゃないか…とか。そんな恐怖感と向かい合いながら、日々回収していました。

新津　皆さんステイホームで家にいたから、生ゴミも多かったんじゃないですか？

滝沢　そうなんです。皆さん家で仕事をして、ご飯もほとんど家で食べていたでしょう。だから生ゴミも多かったけど、お酒の量も増えたのかビン、缶、ペットボトルも多かったですね。普段から3～4月は引っ越しシーズンでゴミは多いんですが、家の片付けとか断捨離した人が多かったようで、例年の1～5倍から2倍近くゴミが出ました。

――7月22日には、「Go　To　キャンペーン」が始まりました。

滝沢　東京は遅かった（10月から）ですもんね。だからゴミの増えた、減ったはなかったです。ただ、例年でいえば、今はオガクンの減ることが分かったです。やっぱり皆さん、家にいたからでしょうね。その分、空港ではインバウンドが増えたんじゃないですか？

新津　7月以降、国内線は増えましたね。国際線もしだい増えましたけれども、まだやっぱり寂しい感じでしたよ。

外国人との接し方と業界の統一ルール

――本格的な冬の到来を迎えて、気を付けたいことはありますか？

新津　第3波が来る前、もうコロナは終息したという感覚の人が多いにあって、結構ここに行ってもマスクを使わない人を見たんですよ。特に年配の方。私も一人で外を歩いたり、自転車に乗ったりしていた時、周囲に誰もいなければマスクを外していたこともありました。でも、最初から外れる人が来たら、すぐ着けられるように工夫してます。でも、最初から持っていないが結構いるのには、ビックリしましたね。私は今も1日2回、朝晩体温を計っています。手洗いや消毒はもちろん、うがいもちゃんと重要を使ってやっています？

新津　口の中が酸性の状態になるのを中和して、ニオイを防いでいるんですよ。昔からおじいちゃん、おばあちゃんがやってきた先人の知恵ですね。500㎖の水に対して重曹ひと一、マスクを着けつぱ＋しだと口臭が気になるので、やってみてください。

滝沢　僕は全場の体調管理というよ、睡眠を十分に取ることくらいです。コロナ以前からインフルエンザが毎冬流行っていたでしょう。あれ、どう考えてもミスの中にもインフルエンザウイルスがいるとは思うんですよ。とこうが、ゴミ清掃員でインフルエンザに罹る人、体が強いんですね、慣れているというか。笑。やっぱり日頃から体を動かして仕事している人間は、体力があるんですよ。

滝沢　特別なことではないかもしれないですけど、やっぱり適度な運動と十分な睡眠、そして手洗い、うがいとうまめなうがいなんでしょうね。

新津　自分でも、思ったより反響があって不思議でしたね。一つには「マシンガンズ」というコンビでお笑い芸人をやって、ある程度テレビに出ていた人間が今はゴミ清掃員になったということが注目されたんじゃないかと思います。でもそれ以上に、ゴミ清掃の仕事を皆さんが知らなかったので面白く読めたらいいです。僕自身、単純にご飯を食べるだけの仕事をやなくて、途中から清掃員が楽しくなってきましたね。それを本人に伝えることもあるし、今当たり前のように生活している、その中の無駄使いや無駄な消費がゴミから見えてくることもたくさんあります。本の中には、そういう話が詰まっています。

新津　私は2015年にNHK出版で仕事の様子が紹介された後、出版社から話がどんどん来たんですね。最初は出版社が皆さんにアドバイスされるままに本を作ったんですが、だんだんと自分でも面白くなってきました。私が知っている清掃のことを、皆さんは知らないけれども必要なものとは、自分の知識がそこまで必要なものとは、テレビに出ることで気が付きませんでしたんです。だから、テレビに出て考え方が変わったんです。人に伝えることが、こんなに大事だとは思っていませんでした。工夫次第で誰でもがラクにして、人生をもっと楽しめる、清掃のあれこれを、これから先も紹介できたらいいなと思っています。また、それに加えて、コロナ禍の体験から得た新しい気付きや発見とかこの要素方にも、深いです。生きていくのに必要なものになりますから。皆さん、ぜひ勉強されたらと思います。